

## 6 月第 1 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 6 月 4 日（日）10：30－11：30 聖霊降臨節第 2 主日

■説 教： 保科けい子 牧師

■説教題：「 約束された聖霊 」

■聖 書：使徒言行録 2 章 22～36 節（新約 p215～216）

■讃美歌：18 「 心を高くあげよ！ 」

353 「 父・子・聖霊の ひとりの神 」

先週は、ペンテコステ礼拝を守りました。五旬祭の日に弟子たちが一つになって集まっているところに聖霊が降り、この世にキリストの教会が誕生した、それが、ペンテコステの出来事でした。その最初の日、十二人の使徒たちを代表してペトロが説教をしました。私は使徒言行録を読むときにはいつでも、この使徒ペトロの説教する姿を具体的に思い浮かべます。聖霊降臨ということがどのような出来事であったかは、先週のペンテコステの礼拝でもお話ししましたが、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。」と記されているように、当時は様々なとらえ方がなされたことでしょう。そのような中で、ペトロの説教は始まりました。ルカによる福音書 22 章で、「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」とまで言い切ったのに、自分の身に危険が迫ると「わたしはあの人を知らない」と必死に逃げってしまったペトロが、人々の前で声を張り上げて話し出したのです。そこにどれほどの多くの力が働いたかを思うとき、私はその光景から本当に聖霊が使徒たちに降ったのだと確信するのです。

その最初の説教において、ペトロはまず旧約聖書の中からヨエル書 3 章を取り上げて、聖霊降臨の出来事が旧約聖書で預言されていたことの実現であったと語りだします。そのうえで「これから話すことを聞いてください。」と人々に呼びかけて、主イエス・キリストについて語ったことが、本日の箇所（使徒言行録 2 章 22 節から 24 節）にかけて記されています。まず初めに、「ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。」と宣言して、その方こそ救い主であり、神様は主イエスのなされた様々な奇跡や不思議な業によってそのことをはっきりとお示しになっていた、と語りました。次に、それにもかかわらず、旧約聖書からずっと語られてきた神様の約束の民であるはずのイスラエルの人々は、その主イエスを受け入れず、拒み、律法を知らない人々、つまり異邦人であるローマの権力に引き渡して十字架につけて殺してしまった、と指摘しました。けれども、ペトロ自身もそのイスラエルの人々の一人であり、何よりも主イエスの身近にいる弟子だったのに、主イエスを見捨てて逃げ去ってしまったのです。ですからペトロがここで深く考えているのは、他の人のことではなく、自分自身が、まさに罪を犯してしまったと

いうことの重さです。しかし、彼は「あなたがたは」と言っています。それは彼自身も含めて彼の説教を聞いている全ての人が、神様が遣わして下さった救い主を拒み十字架につけて殺したのだ、ということ、自分自身の罪として深く意識するためだったのでしょう。そして、そのことを教会は2000年にわたって、聖書の御言葉に聴きながら私たち一人一人に語りかけてきました。それが、毎週、主の日ごとに行われる礼拝であると言っても良いでしょう。

そこで、本当に大事なものは、主イエスの十字架の死が神様のご計画のもとでなされたことだったということです。それは、主イエスの死が私たちの全ての罪を背負っての身代わりの死だったということです。何の罪もない神の独り子主イエスが、十字架につけられて殺されるという出来事を、神様が計画して下さったのです。本当は私たちが受けなければならない裁きを、主イエスが身代わりの死として受けてくださったのです。この神様の驚くべきご計画によって、人間の罪の出来事が、神様の恵みの出来事、罪の赦しの出来事となったのです。教会が主イエス・キリストの十字架を宣べ伝えるのは、この神様の驚くべき恵みを宣言し、語るためでもあります。人間の罪が極まったところに、神様の恵みもまた極まっている、それがキリストの十字架なのです。主イエスの十字架も、復活も、昇天も、そしてペンテコステにおける聖霊の降臨も、全ては神様による、私たち人間の救いのためのご意志とご計画の一環であり、分ち難く結びついている、それがルカによる福音書と使徒言行録を書き記した著者の信仰の内容と言えるでしょう。

使徒言行録の2章25節から31節では旧約聖書の詩編第16篇8節から11節までの引用がなされています。この詩の作者は、「主がわたしの右におられるので、わたしは決して動揺しない」と言い切り、「わたしの心は楽しみ、舌は喜びたたえる。体も希望のうちに生きるであろう。」「あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、あなたの聖なる者を朽ち果てるままにしておかれぬ」と一つ一つ確認しながら語っています。そして、最後に「あなたは、命に至る道をわたしに示し」と新しい歩みへの方向が示されたことを歌っています。主なる神様によって、陰府つまり死の力から解放され、復活の命、新しい体を与えられる、「わたし」はそういう恵みに生かされていると歌っているのです。この詩はダビデが歌った詩編であると詩編16篇には1節にはあります。しかし、ダビデは既に死んでその墓があるのです。だからこの「わたし」はダビデ自身のことではないとも考えられます。ダビデは神様から、あなたの子孫にイスラエルの王座を受け継ぐ救い主が生まれるという約束を与えられていました。その救い主のことを預言してこの歌を歌ったのだと説明する人もいます。そのように解釈すれば、この詩の「わたし」とはダビデの子孫としてお生まれになった救い主イエス・キリストのことなのだ、というのがペトロの説教の中心と言えます。だからこそ、31節では、27節で引用されている詩編16篇10節の「あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、あなたの聖なる者を朽ち果てる

ままにしておかない」という一人称で語られている言葉をキリストの復活に関連付けて、「彼は陰府に捨てておかれず、その体は朽ち果てることがない」と三人称に言い換えて再び語るのです。32節に「神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。」とあります。この言葉は、主イエスの復活はこの詩編に歌われている神様のご計画の実現であった、ということを語っているのです。

33節には「それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。」と記されています。この御言葉から、私はヨハネによる福音書15章25節、26節を思い出します。「わたしは、あなたがたといたときに、これらのことを話した。しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」そして、その聖霊こそはヨハネによる福音書15章16節によれば「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。」という主イエスによって約束された聖霊なのです。神様はこれらのみ業全体を通して、私たちの罪を赦し、新しく生かして下さるのです。約束された聖霊は、そのために今日の私たち一人一人にも注がれ働いていることを覚えたいと思います。

そして、ペトロの説教の結びが使徒言行録2章34節から35節で記されています。ペトロは詩編110篇1節を引用しながら、詩編16篇と詩編110篇の御言葉が主イエス・キリストによって成就したことを語ります。主なる神の右の座に着けられた主イエスは、約束された聖霊を注いでくださいました。その出来事によって、その方こそが神から「主」とされメシアとされたお方であることを、聖霊降臨の出来事に会った一人ひとりに明確に示され、そのことを追体験している私たち一人ひとりにも示されているのです。